

し し かむり ほんでん 獅子冠・梵天ばよい

市指定無形民俗文化財

宮内熊野大社では、毎年7月23日から26日までの4日間、実に盛大なお祭りが行われます。23日は「祭り始め」・24日「よまつり（宵祭り）」・25日は「ひまつり（例大祭）」・26日は「総社祭」といいますが、熊野の御神体とされる御獅子が主役のお祭りであることから、「熊野の獅子まつり」とも呼ばれます。

7月24日午後3時過ぎ、扇を持った乱声役が熊野大社本宮南側の舞殿ちごぼに向かって「らんじょう、らんじょう」と連呼し始まりを告げます。舞殿では稚児舞が7曲演じられます。稚児舞は前日の「祭り始め」でも3曲を演じます。稚児舞がおわると「神輿お下り」です。激しく揉み合いつつ境内を回った後、参道鳥居の手前のお旅所に安置されます。午後5時頃、「御獅子お下り」が始まります。祭りを代々取り仕切る獅子冠事務所の頭取とうどりが、獅子頭を納めた桐箱を背負って石段下の斎場まで運びます。その間行者たちは背負われた獅子箱を取り囲んで激しく叩き合います。これを「箱ばよい」といいます。ようやく斎場に入った御獅子は、「かおみせろ、かおみせろ」のかけ声のなか、箱から出され斎場に飾られます。

7月25日は「ひまつり」です。午後遅く、お旅所に安置されていた神輿は本宮に戻ります。斎場では獅子を前に「梵天ばよい」が行われます。祭りの関係者が次々と梵天を揚げて斎場から大銀杏の間を往復しますが、その梵天めがけて栗の枝を片手に持った「獅子児ししご」といわれる子どもたちが肩車に乗り両脇から激しく叩きます。梵天をもった人は頭や肩など所かまわず打たれながら歩みを続けます。それが終わればいよいよ「獅子ばよい」です。祝詞が終わると、斎場内でまず頭取が御獅子を舞わします。そこを目がけて行者たちが殺到します。霊験あらたかとされる御獅子のたてがみ（オシダ）を奪い合うのです。斎場から参道に繰り出した御獅子は、肩車された獅子児たちに頭を打たれながら思う存分遊びます。御獅子は拝殿に納まるまで、立場たてばとよばれる定められた11ヶ所で舞うことになっています。激しく行きつ戻りつしながら石段を登り、最後に八幡神社前での御礼の舞いをして拝殿に上り、獅子頭を拭き清めて元の桐箱に納められると獅子冠の祭りはすべて終わります。



このように熊野大社の「獅子冠」は、激しい「箱ばよい」「梵天ばよい」などが加わって、他にはみられない特徴ある祭りの姿を示しています。

南陽市文化財保護審議委員 菊地和博
平成25年7月1日号 市報なんよう掲載